

全てのファッションホモに、

愛と憎悪の

花束と嘔吐を。

序

「ここはどこかの劇場。暗幕の前に一人立つ。

「さあさあ、いらつしやいましたなあ！ 崇高なる読者諸君！ 名乗る者では御座いませぬ。一応名乗ると正邪……という役なのです」

舌を垂らし、口が回る。正邪という芸人は道化を演じたかのように動き、話す。

「君たちには、殺意の対象になる存在がいますかね？ いいや、殺意とは言わないですね。むかつき、嫉妬、憤怒そんな小さな芽でもいい。不快となる感情を宿したことがありますかね？」

「ファッションホモ……彼らは殻で守り慣れ合うのです。ええ、ホモというコンテツです。」

一人芸は続く。

「私は慣れ合いが嫌いなのです。慣れ合いです。そう、彼らの慣れ合いで蔑まれるホモたちよ！ 今こそ、反逆の手を彼らに向けようではないか」

「我々、本当のホモにとって、彼らは迷惑極まりないのです」

「おっと、私自体がホモや同性愛を侮辱しているって……？ ふうむ、そうお考えですか。では、私の姿を見て頂きましょう……」

そこにいたのは一人の男。ギザギザと模様があるスカートの下にはピンピンに腫れた陰茎と金のピアスが巻き付いた勃起した乳首であつた。勃起した陰茎にはぶつくりとピンクのゴムが被せられていた。正邪は男であつた。「ふっふ、ひひひ。もつと見てくださいまし。興奮してしまいます……！ ああ、もうお時間のようです……では、ここ『幻想郷』で本日上演される2つの物語をお楽しみください」

正邪の後ろから屈強な男が数人現れる。彼らにスポットライトが当たらない。彼らは正邪を犯すように手で弄ろうとする。手で触れることを楽しむように、後ろの暗幕へと動く。

拍手喝采、幕が開く。愚かなるファッションホモたち、残された彼らの道は幻想に帰す破滅か、それとも……。

『これから自殺するキモヲタだけど質問ある？』

拜啓、お父さん、お母さん、お姉ちゃん。先立つ不孝をお許し下さい。

孫の顔どころか結婚相手すら見せられなくてごめんなさい。

俺が喪なのはブサイクに産みやがったせいだ、つて思ったこともあるけれど、お姉ちゃんが普通に結婚してるからきつと俺の性格が悪いからだと思います。

性格が悪いから、死ぬ言い訳をぐだぐだと並べようと思えます。

知つての通り俺は同人活動をしていました。

とは言え、中学高校と美術の成績が一だった俺に絵を描けるワケもなく、よくある話ですが小説を書いてネットに公開したり、同人誌を印刷してイベントで頒布していました。大手、と言えるほど売れっ子でもなく、しかし在庫を抱えて泣き崩れるほどの小手でもない低空飛行で、インターネット上で知り合った知り合いとイベント会場で喋ったり、たまに打ち上げに参加したり、十把一絡げに存在する、ひどくありふれた、売れない同人作家にありがちな日常を過ごしていました。

ある日、サイトに一通のメールが来るまでは。

イベント後にエゴサーチしてやつと作品の感想をふたつみつつ見つけてはスクショをとってニヨニヨする気持ち悪い奴だった俺は暗記するほど読み返しました。メールの署名に添えられていたツイッターアカウントに見覚えがあり、スクショを確認すると何度か新刊の感想をツイートしてくれている人でした。コスパ写真アイコンだったのと、一冊の感想につき複数ツイートに渡って感想を書いてくれていた人だったので、覚えていました。「はじめまして、〇〇と申します。ツイッターだと字数制限があるのでメール送らせて頂きました」

こんな丁寧な書き出しだったのを、今でも覚えています。一時期、プリントアウトして読み返していた時期だつて、ありました。手紙には様々な想いが綴られていました。

友達に頼んで買っていくつて貰っていたと、

今度は挨拶に行きたいと、そんな社交辞令ともとれる文章に舞い上がっていました。頭の中に文章が想起されています。本当に何度も、何度も読んでいたんだな、と痛感します。

彼のハンドルネームは、暴露しても構いませんが、俺と違って未来がある彼の名譽のためにやっぱ伏せます。しかし「彼」と書くのも今後の文章でややこしい気がするのです、（ハンドルネームに更に仮名を与えるのも、なんだか変な話ですが）、「雨夜」という仮名を以後つけます。理由は、晴れた日より雨の日の方が好きだと、よく言っていましたから。

俺が雨夜に送ったメールの返事は、悩みに悩んだ末「メールありがとうございました。感想頂けてとても嬉しいです。よろしければ今後ともよろしくお願いします。」という、なんとというかテンプレートそのまま貼り付けたような代物で、送信した後、津波の如く打ち寄せた後悔の余り床でもんどり打ちました。折角のファンを作るチャンスをコミュ障特有の塩対応でフイにしてしまったとも思いました。今思えば、フイになつてればよかったです。雨夜から更に返信が来ることはありませんでした。メールの署名にも添えられていた彼のツイッターを見てみましたが、俺へのメールや、俺からの返信に言及するツイートは全く、タイムラインを遡る都度、嫌われることへの恐怖と自意識過剰と楽観視がせめぎ合い、俺はごちゃごちゃになった自分の心から眼をそらすために、必死で新作に没頭しました。

昇華というのは一番人間の文化的な防衛機制と聞きますが、その通り、実際その時に書いた小説は今読み返しても面白い、俺の最高傑作と言っているものでした。それこそ、遺作と呼ぶに相応しいほどに。

過去に何度か表紙を依頼している友人兼絵師に、依頼のために原稿データを渡したところ、「普段と雰囲気違う気がするんですが、どうしたんですか？失恋ですか？w」と冗談まじりに訊かれた時は、どう返していいかわからず、ディスプレイを前に強ばりました。スカイプの文字チャットだからこそ、彼女（絵師は女性でした）は本質を見据えていたのかもしれない。

イベント当日、左右のスペースへの挨拶と、近隣に配置された知り合いと新刊交換を開場前に済ませ、買い物はタイミングを見計らって行こう。そんなことを思いながら、貰った新刊を読みながら目の前を他の参加者が通り過ぎていくのを見ていました。ぼっちサークルにはよくある話です。本を読み終え、新刊や既刊がちらほら売れて、そろそろ買い物物しにいいこうかなと立ち上がりかけたとき。

「あの……（俺）さん、ですか？」

天子コスをした男性が、スペースの前に立っていました。顔を見て雨夜だとすぐに分かりました。フォトショで加工されたアイコン写真よりも、生きた表情を見せる生の姿の方が、ずっと綺麗に見えました。

「すいません、もっと早く来たかったんですけど、着替えに手間取っちゃって」

伏せられた長い睫が目元にうつすら陰を作っていて、イケメンは細部に至るまでも美しいと見とれてしまいました。その睫が、つまつげをふたつ重ねて着けたものだど知るの、もう少し後のことでした。

俺はその時彼に何を言ったのやら……テンプレのようなメールを送ったことの謝罪と、挨拶と……思いつくそうとする度に臆気になっていきます。雨夜の言葉は、ひとつひとつ覚えていくのに、返した俺の声はノイズだらけで想起を拒みます。覚えていたら、思い出してしまつたら、後悔が止まらなくなるから。

明確に覚えているのは、名刺を交換したときに、俺の手と彼の指が軽く当たったことぐらいです。

ではまた、と去って行く彼の背中を見送つて、俺は力が抜けたように椅子に座り込みました。戦利品を読む気も買いに行く気も失せて、ぼうと机の上に置いた名刺を見ていました。

雨夜の名前、ツイッターやコスプレイヤーズアークイブ、スカイプのIDが記載され、スタジオで撮ったと思しき、幽香コス姿で微笑む彼の写真が添えられていました。

閉会ギリギリに買い物を買わせて、既に撤収してたり完売していたサークルは書店で買えば良いと諦めて、アパートに帰宅しました。荷物を解くのもそこそこベッドに入り、財布に入れていた雨夜の名刺を出しました。

掌にすっぽり収まる紙の中で、雨夜が俺に笑顔を向けていました。家には俺しかいない

のに、誰が来る可能性もない独り暮らしなのに、自然と緩む頬を必死で抑えていました。感情を自分にすら秘めたいなんて思うのは初めてで、自分で自分に混乱を来していました。

認めたくはありませんでしたが、ありえないと思いましたが、俺は雨夜が好きなのだ、気付きました。本名も、年齢も、職業も、彼女の有無も知らない、ハンドルネームとコスプレした姿しか知らない、さつき初めて会っただけの同性に恋をしていると、気付いてしまいました。

もう一度喋りたい。もう一度会いたい。今度はやんと触れたい。願わくばセックスをしてみたい。ぎゅうぎゅうと感情が溢れ上がつてきました。いつの間にか俺は勃起していました。ベッドの上で四つん這いになり、名刺を見ながらオナニーをしていました。雨夜にペニスを触られているところを想像しながら、彼の笑顔に淫らな妖しさが入るのを妄想しながら、彼の裸を見ることを夢見ながら、センズリこきました。

自分はいくまで、雨夜に好かれるただの作家でなければいけないのにと後悔しながら、酷く後味の悪い射精をしました。ウェットテイスシュで拭っても手から精液の匂いがある気がする自己嫌悪に苛まれながら、俺は漸く、雨夜をツイッターでフォローしました。

五分後、「好きな作家からフォローされてちよつと動悸がw」というツイートが走り、嬉しさを覚えると同時に、やはり自己嫌悪が胸を軋ませました。

それからしばらくは何もありませんでした。普段通りエゴサをして、ツイートをして、普段通り他の人と適当に交流して、タイムラインの唐突な大喜利にたまに便乗する。ありふれた東方同人サークルのツイッターです。

ただ変わったことがあるというのなら、雨夜とリプライをしあうようになったことでしょうか。俺が必死にリプライのキャッチボールをしようとしていたのもあるかもしれませんが、雨夜はコミュニケーションが上手で、俺が暴投したと思っても綺麗に受け止めて返してくれました。嬉しいと喜びながらも、内心ではオカズにしてしまった罪悪感が消えませんでした。

「ネットで知り合った人と会わない！」という画像が話題になった頃、何だったかの機会で雨夜とさぎよいぶしました。マイク越しの雨夜は、イベント会場で話した時やツイッターでの交流と同様に気さくで話題が豊富で、俺の巧いとは言えない喋りを熱心に聞いてくれる、神様のような対応でした。

何度目かの通話の時に、雨夜がバイセクシャルであること、今は非ヲタの彼女がいるけれど仲が芳しくないことを知りました。彼女がいるということに凹み、彼がバイセクシャルであり、彼女とは破局カウントダウンということに舞い上がりました。男もいけるのであれば、今のパートナーと別れて独り身になれば、ワンチャンいけるかもしれないと、自分の顔を鏡で一度も見ることがないかのような思い上がりをしてしまいました。童貞のくせ

に。彼女いない歴〇年年齢のくせに。服は全部ユニクロの癖に。

身の程知らずな下心を持った俺は、極力聞き手に回り、慰めました。恋愛偏差値が死にかける老人並みの俺でも、つらい時に優しくしておけば絆されるぐらいは分かっていますから。

「愚痴聞いてくれてありがとうございます」そんな言葉に口角が上がるのが堪えられませんでした。にやけそうになるのを抑えて、落ち着いた声で、感情を悟られないようによき理解者に聞こえるラジオドラマを演じていました。

それから半月ほどして、Skype に雨夜からメッセージが来ました。「すいません、酔ってて、呂律じしんがないんで、文字ちゃでいいですか？」

「大丈夫ですよ」「すいません。あの、彼女と、別れて、覚悟してたのに、めちゃくちゃショックで、家で飲んで、さびしくて」

普段の雨夜らしくない話題に一貫性のない、またループを繰り返す愚痴を、ぼやきを、相槌を適度にタイピングしながら相手をしました。

話題がループほどした頃、悪魔が囁いたのか、喪男童貞特有の空気の読めなさだったのか、それとも眠くてチャットを終わらせたかったのか、手が勝手にタイピングしていました。

それが、破滅への序曲とも知らずに。

「雨夜さんつらかったですね。俺だったらそんな想いさせないのに」

画面が沈黙し、一分ほどして鉛筆が動くアニメーションが表示されました。

「ありがとうございますw」

「お世辞じゃないよ、好きだったんです、雨夜さんのこと。キモいと思うけどオカズにしましたw」

ログを確認したら、それから五分ほどチャット画面は沈黙していました。五分。たった五分でした。しかし当時の俺は、死刑執行までのような数時間に感じられました。

「すいません、ちよつと落ち着きました。おやすみなさい」

メッセージが表示されるなり、雨夜がオフライン表示になりました。

やつてしまった、と痛烈に後悔しました。

もう少し慰めてから言えばよかったとか、オカズにしたことは黙ってよかっただろうとか、壮絶な一人突っ込みが俺を襲い、涙が止まらなくなり、泣き疲れて寝落ちしました。泣き腫らした気持ち悪い顔で出勤したら、花粉症を疑われました。

雨夜はそれからツイートせず、スカイプもオフラインのまま、三日が経って、オフライン表示の雨夜から、メッセージが届きました。ほつとすると同時に、ずっとオンライン状態を隠されていたんだな、と凹みました。

「〇〇さん、コスプレしませんか？」

予想だにできなかった唐突な誘いでした。自分の顔に深刻なエラーが存在していることは、

二十六年生きてきて嫌と言うぐらい分かっていましたから、誰かと顔の記憶がごっちゃになつていいのか、それとも嫌がらせかと思ひました。

「俺の顔、どんなツラか知ってますでしょ」

「そうですけど化粧すればいくらでも顔立ちなんか作れますし、○○さん細身ですし。○○さんの好きなキャラでいいから合わせしましょうよ」

確かに細身ですが別に細マツチョというわけではなく、メシに興味が無いガリヲタなだけですよ。

「先日は変なこと言ってしまったで大変申し訳ないと思つていますし、謝罪や償いはしたいと思つています。他人のコスを見るのは好きですが自分でコスしようという気はありません。雨夜さん美人なんですから、俺なんかよりもっとコスプレ映えるイケメン見つけて下さい。」

鉛筆のアニメーションが、随分長く流れました。書いては消し、書いては消しの繰り返しをしているようでした。

「なんでそんなこと言うんですか俺だつて自分がブサイクでデブなのに努力してやつてるのに○○さんも俺を見下すんですかやめて下さい」

本当はもっと長かった上にちよいちよい昔デブだったとか今もデブだとか生まれ変わったら小池徹平になりたいとかの自分語りも混ざるので、コピペするのも鬱陶しいので以下省略、ということ。

今ならこんな地雷(地雷)は切れとか、新しい恋探してノンケになれとか他人事のように言えますが、惚れた弱みと、このままイケメンと付き合えるかもしれないという諦めの悪い下心が、雨夜に執着させました。

「じゃあ、あやはたやりましょう」

こんなことを、打ち込んでいました。

アドバイス通り、コスプレイヤール向けの売買掲示板を使って、定価で買うと一ヶ月の食費が飛ぶお値段の文ちゃんの衣装を、ウィッグとセットで一万円で購入しました。男性用の靴は流石に手に入らなかったもので、通販でそれっぽいのを買いました。二万円でした。これでも毎食イオンのカップ焼きそばで生活している人間には大出費です。ガチャ何回回せるかと考えると眩暈がしましたが、それは下心で乗り越えました。

一式が揃ったことを伝えると、新宿で会いましょうと言われました。

新宿のドンキ前に、午前十時。飲み会で歌舞伎町に行つたことはあれど、昼間つから行くのは初めてで、陽光の下で見る歌舞伎町は少し間抜けに見えました。龍が如くのトレーラー映像を見ながらぼうっとしていたら、肩を叩かれ、振り向くと雨夜がいました。

彼は顔つきは化粧で誤魔化せると言つていましたが、化粧を落として男の服装をしていても、彼の目はぼつちりとしていて、劇団員に似そないイケメンでした。

「服持つてきましたか？」

「あ……はい」

「じゃあ行きましょうか」

コスプレ用のスタジオがあるのかな、と思つていましたが、俺の予想に反して雨夜はぐんぐんと人気がない方に歩いて行きました。所謂ラブホ街の方角です。

「あの、雨夜さん、もしかして」

「ラブホってスタジオ借りるより安いし、洗面所あるからメイクもしやすいんですよ。この辺だと男同士も入れますし」

そんなものか、とアホな俺は納得してしまいました。奥まった所にある、ちんまりとしたラブホテルに入り、雨夜がフロントのパネルを見て、空室を適当に選ぶのを見ながら、俺は噂には聞いていたラブホの無人フロントというものにちよつとした感動を覚えていました。部屋代は割り勘で四千円で、意外と安いな、とも思いました。

部屋は、実際の面識はともかくベッドとバスルームが大部分を占めているせいで、蒲田のビジネスホテルとさほど変わらない広さに感じました。白とベージュがメインカラーの室内でソファだけが真っ赤なのが扇情的で、そこだけが俺の中のラブホのイメージと一致していました。

ベッドの上に服を広げて着替えました。おっぱいを偽装する必要もあつて、家で一度着てみてはいたのですが、雨夜の目があつたからでしょう、着替えているだけなのに、心臓がだくだくと騒がしくなりました。俺の興味がないからか、メイクの知識がないからか、

服が濡れないように胸元にタオルを巻いて顔を洗ってからの記憶は曖昧です。なんか顔に叩き込まれたりはたばたされたり、……あ、つけまつげ盛られたのは覚えてます。まぶたが一気に重くなつて、女子つて大変だな、と感服しました。でも相変わらず、つけまつげはゲジゲジか何かにしか見えません。

「はい、できましたよ」

鏡で見えました。化粧して文コスをした俺がいきました。現実なんてそんなもんです。シジミみたいな目が大きくなつて見えたのは感動しました。それにしてもまぶたが重かったです。

まぶたの違和感が気になつて、雨夜の着替えと化粧が向かなかつたのは、ラッキードだったのか、ラッキースケベを逃したアホの所業だったのか、俺がつけまつげの重みに慣れた時には雨夜は着替えを終えていました。「どうですか？ コスつて凄いでしょ」

「はあ、……まあ、そうっすね」

我ながらお世辞を言うのがご覧の通りド下手です。雨夜にも伝わったようで、唇をとがらせてくれました。あざとい怒り方でした。とがった唇のまま、雨夜にキスされました。「俺としたいんでしょ？ 俺で抜いたんでしょ？」

笑いながら押し倒され、唯一男物のパンツ、ちなみにボクサー派です、を脱がされました。あれはセックスだったんでしょか。俺が童貞特有の妄想をしていただけなんですか。挿入して射精するだけならオナホでも、

こんなにやくでもカップラーメンでもなんでも使つてひとりで済むことです。俺が雨夜としたのは、そういうものでした。セックスへの幻想をほぎ取られるような行為でした。ぎゅうぎゅうと締め上げる雨夜のアナルの感触が生温くて、はたてコスの姿で喘ぐ雨夜がいて、俺がどう言い訳しようとも今自分がしているコトは紛れもなくセックスでした。

ペニスを包み込む感触に死にそうになりながら、射精しました。

「ちゃんと、洗濯しなきゃだめですよ」

お互いのスカートが、雨夜のザーメンで汚れていました。

\* \* \*

しかし何故か流されるように、例大祭までの間、俺は幾度となく雨夜とセックスをしました。都内の男どうしでも入れるホテルは一通りチェックしたと思います。スタッツに覚えられるのがなんとなく嫌で、場所を変えては、性を重ねるセックスをして、サービスタイムの間ずっとだらだらしながら映画を見て、居酒屋で飲んで帰る、そんな休日を通しました。例大祭で俺が珍しくコピー本のレビュー版だったのは、そういうことです。すいませんでした。休憩で済ませてさつさと帰れば、予定通りに出来たと思えますが、雨夜が離してくれませんでした。ベッドの中でポメラを開こうとすると露骨に悲しんだり、手帳を奪つて床に叩きつけたりしてきたので、

三度目の逢瀬の時にはもう筆記用具もポメラも持つて行かなくなりました。明らかに俺を道具としか見ていない相手だと分かっているのに、嫌われるのを恐れていました。

例大祭前日も前夜祭と称して会つていました。明日はセックスせずに会えると思いがながら別れて、新宿南口のキンコーズでコピー本を作っている時は、自分がなにをやっているのか分からなくて、ホチキス留めをしながら泣いていました。

翌日はまあ、特に書くことはありません。

雨夜と、絵師と合流して、設営を彼女に頼んで俺と雨夜は更衣室に直行して着替えて雨夜に化粧を着て貰い、スペースに戻ったらまず絵師に爆笑され、挨拶周りに行けばやつぱり爆笑され、雨夜はコスプレ広場に行つて殆ど戻つてこなかったとか、そういうよくある話です。売り子とはなんだったのか。

「最近このサークルの漫画、徒歩二分の影響隠さなくなりましたね」

「前の作風の方が好きでしたわ」  
「ですよー。ほらあれ、去年の恋まりで出してたやつとか」

「あー！」

絵師と普段通り同人誌の話で盛り上がっていると、雨夜が、小町コスをした女性を連れてスペースに戻ってきました。

「○○さん、こちら今日の打ち上げの主催のヨツエさん」

「はじめましてヨツエです。雨夜さんから聞いてましたけどホントあやはたなんですねー」

動揺を隠しながら椅子から立ち上がり、頭を下げました。打ち上げとか聞いてませんでした。確かに終わったら飲もうと雨夜に誘われていたが、誰かを交えてなど初耳でした。しかし今言ったら採めると思い、社交辞令を口にするにとどめました。

「ああ、は、はじめまして。お噂はかねがね……」

「どんな噂ですか」

「本買つてましたんで」

「えー、そんな恥ずかしー！ あ、あとそちらの方は……」

「あ、私別の打ち上げ予定入れてるんでお構いなく」

「だそです」

そんな感じで挨拶を済ませると、雨夜とヨツエさんはコスプレ広場の方向に戻っていききました。

「いやあ、あやはたホモ見れて眼福ですわー」

「ホモじゃないですつて」

「そうなんですか？」

からかいながら絵師が、手遊びにスケブに権を描きだしていました。

「もう十四時なんで、混む前に着替えてきます」

「はい」

もやもやとした気分に参加した打ち上げは、意外と楽しかったです。大人数での打ち上げがあまり経験ないもので比較はできませんが、大人数でわいわいと東方の話をするのは普段はできない経験でした。天則のレートの話

しながら雨夜を横目で探すと、彼はヨツエさんと楽しそうに喋っていました。こちらに混ざる気配はなかったため、俺は構わずパチュリーの使い勝手について熱弁しました。楽しかったのもあります。楽だったのもあります。雨夜との会話で東方やオタク話をしていなかったことに気付いてしまったのもあります。雨夜と喋っていたのは、愚痴を中心とした彼の自分語りと、俺の意識の低さを責めるものでした。雨夜と過ごすことが嬉しいと思いいんで、その内容から目を背けていました。俺はオタクです、愚痴よりも何よりも、二次元やニチアサの話をするのが楽しいはずなのに、いつの間にか雨夜に抑圧されていました。ニチアサについては特に、バイトに行く途中にツイッターを開くと楽しそうにみんなが実況するのが腹立つから、〇〇さんだけはやらないで、と理不尽なお願いをされたせいで、実況も出来ずぼうつと見ているだけになっていました。気付かないまま俺は雨夜に自分の娯楽を削ぎ落とされてきたのだと、ぼんやり気付いていました。いや、とうに気付いていたのかも知れませんが、それでも好きでした。

明日は月曜日だからという理由や、地方から来ているひともいるからという理由で、打ち上げは二十一時には解散しました。その時には他に話が合う人もいて、雨夜の存在など、本当に忘れて盛り上がり、がやがやと駅まで移動し、帰る方向が同じだったサザメさんという男性とは、彩社長はもう秘封本を出さなின்றろうかと凹みあいました。

翌日、仕事終わりにスマフォを見ると、スカイプのアイコンがとんでもない数の表示をしていました。全部雨夜からでした。スペースに自分以外の売り子がいたこと、ヨツエさんを連れてきた時にふたりで楽しく喋っていたこと、打ち上げで自分を放つて盛り上がったこと、自分をおいて帰ったこと、打ち上げで知り合った人をフォローして昼休みにリプライ合戦していたこと。全て俺を詰る内容でした。

何を言っているんだ。俺は初めて、自覚する範囲初めて雨夜に怒りを覚えめました。彼女は雨夜よりも付き合いが長く、表紙を描いてもらうお礼の一環でサークルチケットを渡していること、雨夜は殆どスペースに戻らず売り子も何もしていなかったこと、彼女とは同人誌の新規開拓の情報交換をするのが約束だということ、打ち上げで雨夜はずつとヨツエさんと喋っていたから他の人と喋るに徹したこと、雨夜とは帰る方向が違ったから気にしなかったこと、昨日だけだと喋り足りないから盛り上がったこと。全て反論しました。

「それに、雨夜さんだって俺よりヨツエさんと話すのが楽しいんでしょ」

打ち込みかけて、全部消しました。惨めな話かもしれないが、何度でも言います、それでも俺は雨夜が好きでした。独占欲を向けてくれる雨夜を嫌いになれませんでした。だからこそ、雨夜が許せませんでした。打ち上げの主催でしたし、名刺も交換しましたから、ヨツエさんもフォローしました。

ご存じとは思いますが、ツイッターはフォロ―している人どうしのやりとりがタイムラインに表示されるようになります。俺がサザメさんや他の打ち上げ参加者とリプライしている間、雨夜はひたすらヨツエさんとリプライを飛ばしあっていました。

雨夜からヨツエさんへのリプライの内容は、雨夜が俺にかけてくれた言葉と、そっくり同じでした。

彼は今度ヨツエさんと飲みに行くそうです。きつと彼はヨツエさんとセックスをするでしょう。彼は蝶々だったんです。男も女も関係なく、より綺麗で、より美味しい蜜を作る花を求めて転々と飛び蝶々。俺が悪いんです。そんなひとを好きになっちゃった俺が悪いんです。でも俺は彼なしではもう生きられない。だから死にます。お父さん、お母さん。先立つ不幸をお許し下さい。

東方夜伽話に投稿し終えると、私はため息を吐いた。エロくもない、東方でもない、ただ東方界限にいる人間のドロドロを書き殴っただけの小話。ガイドライン完全無視、早々にコメント欄は指摘で埋まり、本文もろとも削除されるだろう。読んだ人はなんだこの女が腐ったような話だと思っだろう。でもそれで十分だ。一瞬だけでも誰かの記憶に私の心情が刻まれたら、「私」なんか存在しない。雨夜も、ヨツエも。創作物の中で「俺」が傷を舐めあうファクションホモに溺れて死んだだけだ。

スマフォがぶるつと震えた。通知欄がラインの緑色のアイコンで埋まっている。雨夜の……いや、リナからのメッセージだった。

「助けて■ちゃん！ 高田さんとホテルに入っちゃった」

一分前の最新メッセージ。その前はひたすら、その高田さんとの楽しいおデート実況。入っちゃったじゃねーよ自分から入ったんだろスタンガン当てられるかナイフで脅されるかしてハイエースでもされたわけでもねーだろ、自分が可哀想な被害者と思いきむのが大好きな性悪女。よかったですわー壁大手とお友達になれて。美人は得ですわーすつごい大手サークルとセックスできるからいいんじゃないですかねー。クソアスベのヨツエ(仮)みたく中出しされて怯えてろクソビッチ。

スマフォのロックを外し、ラインを開く。これで既読がついただろう。安心してまた、私に助けを求めるだろう。

「よかったじゃねーかクソマンコ」

それだけ打ち込んで、ノートパソコンとスマフォを水を張っていた浴槽に叩き込んだ。入浴剤まで入れてあるから、これで電子機器は死んでくれるだろう。あの女は私からの既読がつかないことに怯えながらセックスにこそしんでいれればいい。お前は一生そうするしかできない。

パソコンとスマフォがないと死ぬと思っただけで、本格的に死ぬか。

ライムグリーンの水に沈んでいく、私のすべてを見ながら、私は浴槽にサンポールとムトーハップをぶちまけた。

『アノマリリスは無慈悲な闇の淫魔』

池袋

サンシャインの通りから数分歩き、ラーメン屋とかカード屋とかがある通りに入るとラブホテルが数軒並んでいた。

そこへ、男と女の恰好をした男がホテルへと吸い込まれていく。

男の恰好は、オタクチックな上も黒、下も黒、そしてぐりぐりメガネに少々太目な体型であった。

女の恰好をした男はというと、これまた、オタク系男子とはかけ離れていたファッションだが、黒を基調とした服装で帽子にマスクと口元を隠していた。女装特有のアレである。細い体のラインを見せるように、歩く姿はオタク系男子のねっとりとした目線で追われていく。

「あ、三時間お願いします」

あ、あ、と何を話す前にも「あ」を付けるオタクの話し方をスルーしつつ、鍵を渡され二人は部屋へと上がるエレベーターに乗る。オタクくんは、ラブホテルが初めてで、ようです緊張で汗をダラダラと滝のように流す。

部屋に入ると、

「先にシャワー浴びてきてね♥」

語尾に甘えを加えてキュートさを見せてつけて懇願する。オタクはうんうんと頷き、服を

入れる籠を持って浴室に入ってしまった。フンスフンスとセックスする気満々に鼻息を荒くしながら……。

\* \* \*

男のシャワーを浴びて身体をタオルで拭いながら出るとベッドの上には、なんと東方プロジェクトのキャラクターの青娥がいた。原作のように羽衣は宙に浮かんではいないが、服装、そして特殊な髪型は原作の青娥と同じであった。

いやはや、読者諸君、もうお分かりかと思うが、彼ら二人は援助交際みたいな何かをするために池袋のラブホでコスプレホモセックスをしに来ていたのだ。

しかし、ここ池袋のラブホにいる青娥はオタク系ファッションホモをの精液を喰らう淫魔であったのだ。驚きである。

援助交際するファッションホモ専門の淫魔がいたことに。淫魔は人にまぎれて生活をするため、お金が必要なのであった。

勿論、オタク系ファッションホモはサブカルチャーでホモエッチについて、存じているが童貞であり、アナルも未開発なピクシブのエッチ系な絵で抜くシコ猿である。

閑話休題

青娥を見るや否や、オタクくんは近づき、「あ、抱きしめてもいいい？ あ、抱きしめてもいい？」と何度も聞きながら相手の承諾を聞かず、抱きしめた。

すんすんと青娥を嗅ぐ。それを行うオタクくんは嫌悪せず、青娥は抱き返してナデナデと全裸オタクの肌を撫でる。母親のように甘え、母性を感じながら匂いと姿で官能を味わう。コスプレ衣装特有のスルスルとした手触りが全裸のオタクに肉欲を高ぶらせる。

股間にあるイチモツを大きくさせながらオタクは胸に顔を埋めて、股間をすりすりと擦り付ける。

ベッドへ横になる。カクカクと腰を振り続ける盛ったオタクのシミがついた我慢汁パンツを青娥は下ろし始めた。

「へえ、すっごいカチンコチンチンだ♥ いいねえ♥ これでボクのことパッコパッコしてくれるんだ♥ 嬉しい♥」

いきり立つペニスをじっくりと観察する。肉竿は稲妻のように血管を浮かべ、快楽をまだか、まだかと待ち焦がれていた。先端からは粘液の汗が吹きこぼれ、これがパンツのシミの原因であった。

「あ、ママ！ ママって呼んでいい？」

とここで、オタクくんはある意味、尊厳を失うお願いを青娥にする。

「いいでしゅよ〜♥♥ 青娥ママとホモセックスしましょうね〜♥」

オタク特有の相手の包容力に母性を感じて子供に戻ってしまうようだった。

「キスもママに任せてね♡ 舌で口内しつかりママの味を練り込んであげるからあ♡」顔を同じ位置に合わせ、キスの姿勢に入る。唇をこじ開けるように青娥の舌が入っていく。

じゅりゅじゅりゅと唾液の音が鳴り、唾液の交換が続く。青娥の舌は相手の舌の表面を媚びるように擦り付けていく。

「んっじゅぶぎゅぶずず〜♡ はあ〜♡ ママがキミのよだれ飲んじやった♡ すっごく美味しいよお♡ じゃあ、次は横になりながら、オチンチンシコシコしようねえ♡」

薄く一回り大きな衣装をずらして青娥は乳首を露出させる。勢いよく胸に飛びつき、白いふくらみの中央にある小粒を舐める。

「はあい♡ 頑張れ♡ シコシコ♡ ママのおっぱい無くてごめんね♡ 乳首はむはむして頑張ってオチンチン射精しちゃおうね♡」

甘噛みされると電流の快楽が青娥の脳を駆け巡るが本当の母親のようにあやす仕草で丁寧につちよにつちよと我慢汁に覆われた牡棒をしごく。

シュッシュッと上下に動かす手の中にあるペニスに限界が訪れる。欲望の汁が上に、上にと登り、ぷつくりと膨らみ、アピールを始めた。しごく力に比例して乳首を甘噛みして吸う力も強くなる。

「イけ！ イけ！ しつかりイけ♡ ママのおっぱい舐めながら射精するんだぞ♡ 手の

中に射精して悪い物全部出しちゃえ♡」

「じゅりゅりゅ！ ママあ……！」  
ぼつぶつぶぶぶ！ んびゅびゅ〜！  
ふつびゅびゅ！

手に包まれたペニスから噴火のように精液が湧きだした。男のとろみあるミルクは亀頭部分の割れ目からどぼどぼと染み出てくる。ぢゅー、ぢゅー、と牝の胸を吸う力も射精によつて弱まる。その後、ふうーふうーと達成感を示した吐息と共に、口を離した。

青娥は手に付いた精液を舐めながら次のラウンドに向けて、「アナルの準備してくるね♡」と、トイレに入ってしまった。オタクくんは射精した達成感を胸にじんわりと味わいながらひくひくと震えるペニスを再び大きくしようと手で触れた。

「あ、あの僕を男にしてください！」

「んふふ、ママじゃなくていいの〜？」

トイレからは洗浄を出来ているかと、確かめている青娥の声が聞こえる。

「あ、はい。本番出来るの本当に楽しみにしてたんです！」

トイレから出ると、男の前に立ち、スカートをめくり股を開く。彼は、その姿を見て股から汗をこぼれチンポを懇願する架空のゲームの女を想像した。そこには膨張された牝ペニスと綺麗な濃いピンク色のアナルが眼に入る。青娥は鞆から取り出したローションの蓋

を開き、指にローションを絡ませて、アナルへ指を向かわせた。

洗浄された清潔なアナルにぬつぷりと指を入れる。人差し指はヒクヒクと収縮し疼く肛口に挿入されていく。次に中指、そして薬指と三本を奥に、前に前後運動をして、牡を受け入れることが出来るアナルを見せつける。

「んう♡ んぐう…:はあ♡ もう準備万端ですよ♡」

「あ、あつ、あつ」

バックから犯す姿勢になると、青娥は元に戻った膨張肉竿に手に絡めていたローションを移す。ローションだらけになった肉竿は尻肉にびったりとくっつき、すりすりとならぶクすべき穴を見つけている。

「もう♡ もうちよつと下♡ 下っ♡」

ズキンズキンと脈動する肉の竿がひくひくとローションまみれになった肉の陥没した穴へと吸い込まれていった。

「くっふう…:♡ はい、入りました♡ そのまま奥にぐう〜んって入れてね♡ 生チンポは青娥専用の尻マンコに深く、侵入するの♡」

柔らかい尻に何度も腰が突かれていく。突きを繰り返す度にムンムンと青娥の色気が放たれていく。

「はううん♡ はううん♡ いいですわあ♡ もつと♡ もつと♡」

ぐちゅぐちゅとピストン運動の熱で温められた蜜壺にペニスを突っ込んでいく。快感が流れるとグッと射精感を堪えて腰を躍らせる。

飢えた媚肉はペニスを包み込み、青娥に欲待を示させる。

「あ、アナルセックス出来てるんだ！これがセックスなんだ！」

口早に叫びながらバックで犯す禁断の行為に喜びを表す。コスプレ淫魔のアナル内で暴れる肉棒は先走りの涙を流しながら射精を待ち焦がれていた。

「わ、わらひのも触つて♡ 触つてよお♡」

男の手を掴み、自分の膨張した芯に持つていく。男は腰を動かすことと同時に竿を握り乱暴にしごいていく。何度もセズリとピストンで疲れから気が抜くと射精する欲求が一瞬でペニスの先へと溢れてきた。

「あああ、ダメです！ 出ちゃいます！ あつ、あつ、ああ……く！」

「え、え、え、良いとこなのに出しちゃうんですの！ ほら、もつと耐えて♡ 耐えて♡」

射精を押し込もうと青娥の腰はぐりんぐりんとして腰の根本へと密着させる。それを最後のスパートと考えた男は射精寸前のペニスをぐつと奥へ挿し大きく腰を振った。パンツ、パンツ、パシシと激しく音が響き、牝の嬌声も共鳴する。男は獣の交尾のようにしがみつき腰を振りまくっている。

「ひいひい♡ そう♡ いいわ♡ 最後のガンバリを見せる腰振り♡ 今からあなたは立派な男よ♡ 牝コス青娥の男に生尻射精して情けないあなたからちゃんと射精する立派な男になるの！」

ビュるるるるうぐうー！ ぶびいばびゆりゆるるるうつるる♡ ごびゅう！ ごびゅう♡

破裂寸前の鎌首から白濁の汁が腸内の奥に吐き出される。ビクビクつと何度か痙攣をして緩い前後運動をすると、腰を後ろに下げて射精で満足したペニスを抜く。

青娥の中に射精をされたザーメンは腸を経由して、淫魔の体内に吸収される。ぎゅつぶ♡ ぎゅつぶ♡ 吸収する音が鳴り響く。

「はあくくよかつたよお♡ 疲れちゃった？ んふふ♡ お金は先にもらつてるから私先に部屋から出るね♡ お疲れ様あ」

寝ている男を無視してウィッグを外し手際よく元の女装に戻していく。男は相手が淫魔とも知らず、全てを搾り取られたかのようにぐつたりと射精感を味わっていた。

コスプレやいやらしい恰好をして男たちを誑かす男性の淫魔は世界中で見かけられるようになつた。

ファッションホモであつた日本のオタクはファッションホモを拗らせるものにも、彼らから搾取される存在となり、普通の女でもいけなくなり、ファッションホモ同士のアナルでもいけなくなつてしまつた。何度も淫魔たちに懇願して望むものを与え快楽を得る家畜に似た存在になつてしまつた。

世界で行われたこの淫魔現象によって、

「人間」の種が枯渇しつつあるのであつた。淫魔たちは。宇宙から飛来して寄生する十四〜十九歳の少年たちを無意識にファッション同性愛者を搾取する淫魔に変える、それは『キユアノス』の細胞と呼ばれるものであつた。隕石から現れた『キユアノス』の細胞は次々にファッション同性愛者淫魔に変えていく。星々の生命体の子孫を残さないようにしていく、彼らが地球に来たのであつた。

『キユアノス』は少年たちをファッションホモに変える。彼らは扇情的な服をまとい、メス男子として淫語を話し、ファッションホモを含めた牝を性的に見る男たちを魅了する。そして、子作りを行うのだ。セックスを行うと彼らの身体から細胞が花の花粉のように吹き乱れる。

『キユアノス』の細胞に犯された少年たちを「ルベド」と呼んだ。

残された人々は「ルベド」を殺戮する為に、開発された「カイザの銃剣」を使い「ルベド」を四肢切断していく。ミーム汚染と責め立てる政治家や政治は力を持つことが出来ず、崩れ去つていつた。勿論、「ルベド」に犯された男は脱力感が身体を襲い、生きることへの希望が射精のみとなつた身体から生気が消え、衰えて死んでいく。

自衛隊や行動派の男性は「ルベド」たちを四肢切断していく部隊を作り上げた。そのうちの一つ「リチャード・バックマン部隊」に杉山と呼ばれる研究者がいた。杉山は愛する男が「ルベド」によってホモレイプされいけ

なくなり、自殺した経緯をもっていた。

彼の心の中には愛していた男がファッションでホモを気取っていたことへの哀しみと淫魔たちに向けた殺意と治療方法を見つける救済の心がグルグルと渦巻いていた。

「リチャード・バックマン部隊」は男子校を占拠して「ルベド」を捕獲、もしくは駆除をしていく。捕獲した「ルベド」は十字架に縛り付けるように一人一人、自転車チューブで拘束させ、口には口枷のボールを啜えさせた。杉山は捕獲した「ルベド」に観察対象としての名前を付けていった。

その中に、ハヤトと名付けられた「ルベド」は一人だけ東方プロジェクトの衣装を着ていた。

杉山はその衣装に見覚えがあった。彼は元東方同人作家であった。青娥と呼ばれるキャラクターの格好であった。恐らくきつと、この「ルベド」は男娼のように簡単に搾り取るのではなくコスプレをして絞っていたのだと杉山は思った。

ハヤトは口枷が外れており、異変に気付いた杉山は近寄った。そして、なぜか杉山に誘惑ではない言葉を吐き出した。

「愚かにも君たちが抗うが、なぜかしら？ 女性たちはもう、子を宿す機能がなくなり家に籠って泣いている……種なしになった男たちは私たちに服従して犬のように囚われた私たちの帰りを待っている。はあ、あまりにも無力だ。私たちはこれから次のステップに移行するんだ。わかるだろう？ 我々も次な

る星を見つめるための準備をするのだよ。種子を隕石に植え付けた遠き星の母がそうしたようにね……」

・・・

「ああ、これじゃない！」

私は、ぐしゃぐしゃと原稿用紙を丸め後ろに投げた。愚かにも私が書く作品とは程遠いものになってしまった。

何がホモとサイエンスフィクションと東方だ。わたし好みのエロを書かせろ。私には無理だ。

何やら、私の後ろからぐしゃぐしゃと音がする。この部屋には私一人しかないはずなのだ。

振り向くと、そこには、眼をあやしく輝かせて、翼と尻尾を生やし、8に似た輪が目立つ青い髪、男のような骨格に先ほどまで考えていた、青いアイライナーをベースに置いたコスプレメイク、それは青娥のコスプレをした淫魔であった。いや、青娥なのかもしれない。

そいつは私が丸めた原稿を元に戻して、手前に出すと口を開いた。

『さあ、はやく続きを描いて♥』

・・・

「つと、こんな作品を予定してるわけ」

筆者の男は、これは東方小説と呼べるのか、そのような己の考える作品とほど遠い作品へと変貌したのを見て思った。作業用のスカイプ通話での独り言をまた呟く。男は文字数が圧倒的に少ないことと最後の展開が駆け足になっていることを気にしながら……。

「あーやつぱり、ボツにするかなあ」

相手の作家が独り言に言葉を返す。男の作品はスカイプを通して送られていた。

「それ、あれですよ。杉山が前半のオタクの男と恋人だつたみたいなの考えてませんでしたか？ 後この作者が出てくるオチいいと思いますよ。後、大槻ケンジのステーションとかをオマージュしていますね」

「あ、そうですそうです。僕、彼の書く作品が好きなんですよ」

「へえ、意外だなあ。私も筒井康隆先生の作品をオマージュしたことあるので、オマージュいいと思いますよ」

作業を片手に、口が動く。彼らは東方同人作家であり、今回のイベントで『ファッションホモ殺す合同』に参加するのであった。

「あ、マイク少し切りますね」

通話相手が少しの間、無音になった。男はメモに書かれたファッションホモと淫魔青娥の世界崩壊を保存して閉じた。このオチではイカンと思い、デウスエクスマキナな筆者を出して終わらせる方法を思考から捨てた。

また書き直しを考える。もうこれでいいか、そんな甘い考えがまぶたに浮かんだ。妥協をし続けるような後ろめたい感じがあったが縮

め切りまで日数は少なかった。

つー、つー、通話相手の空調の音が聞こえる。  
通話相手が戻ってきたことに男は反応した。

「おかえり。もう一回考えてみ、」

「ん、ふふふふふ♥ 吐いては駄目、作品は咀嚼して飲み込んで産み出さなければならぬ。下らない愛と性のファッションホモを消費し尽くすことでしか、私たちは存在し得ないのだからね。あなたはファッションホモを見下し、ホモもレズも恋愛する人々を見下しているの。さ、さ、飲み込んで」

淫魔、青娥の声が長く続く。男は口から言葉が出なかった。

あとがき

はい、ファクションホモ殺す合同 フォビ  
アックスの主催、狭間レヴィです。一番ホモ  
と関わる機会が多い東方が大好きです。ただ、  
私は最近思うのです。どうして、東方はホモ  
で他ジャンルはバブみやら母性やママやらお  
姉ちゃんやらの包容力で溢れているのか……  
と。

勿論、東方の中でもママやお母さんなどと  
いったシチュは多くあるがホモの方が有名で  
す。そんなことを考えながら無気力に例大祭  
からコミケまで生きていました。この合同の  
タイトルの由来を忘れ、創作から手を引き、  
謝らなければいけないこと、やらなければい  
けないことから逃れながら生きていたのです。  
都会のカレーを食しながら趣味を情性で行い、  
向上せずにドラドラと、あとがきが懺悔室に  
変わってくれることはないので、ここで懺悔  
は終わります。

「アノマリリスは無慈悲な闇の淫魔」

元々、最初に出した小説中の作品の続編を  
書こうとしていた。元CIDがその界限から脱  
却して今までしてきた業の深いことを告白す  
る。ある意味、懺悔とも言える作品だ。これ  
は例大祭のプレビューで上げた、ある意味仮  
初の作品である。次の本では非、これを完成  
させたい。

サークルメンバーの業火さんのアイデア  
「ダイヤモンドの気取り屋の作品っぽくない

作品」を書こうとして原案の世界崩壊作品を  
生み出した。どんどんそれが私の作品に組み  
上げられ、こういった形になりました。大概  
ケンジのステーション、小林泰三のアルファオ  
メガ、牧野修の傀儡后、キングの各短編集を  
参考にしました。

最近考えるのは自分は段々追い求めていたホ  
モやそういうものが崩れていき、母性を求  
めてさまよう動く屍なのでは……と、です。  
だからこのように作品が歪み、複雑に創作か  
ら手を放してしまっていたのでは……そんな  
己の情性と絡み合わせるためにこの作品を作  
り上げました。

きつと、もう一人のファクションホモ殺し人  
のかいゆさんと比べたら、文字数や表現は見  
劣ります。殺意も今の私では皆無に等しい  
と思います。殺したいのに殺すことに興味が  
薄れた人間が書いた歪な作品なのです。

タイトルは矛盾を意味するアノマリーと女悪  
魔のリリスとそれを合体したアノマリリス、  
そして、花のアマリリスより。

サークルメンバーの業火さんと喧嘩中のふて  
ね日和さん、色々と付き合ってくれて参加も  
してくれたかいゆさん、忙しい中絵を描いて  
くれた八樹ひよりさんに感謝を

ただ謝り後悔をし続けている私と共にいてく  
れてありがとう。

Open your eyes.For the next Diamond  
Dude!

「これから自殺するキモヲタだけど質問あ  
る？」

レヴィさんに誘われてファクションホモを  
殺しました鵜飼かいゆです。

この話はフィクションですが真実が若干含  
まれます。嘘ですけど。

承認欲求を単純な目的にして愛想を振りま  
くファクションホモもノンケオタサーの姫も  
オタサーのホモ姫もサークルクラッシュヤーも  
滅びろ。あとエイズ検査受けろ。そして死ぬ。

この間献血受けようとしたら低血圧と貧血  
で引掛かったのも、ファクションホモのせ  
いです。嘘です。

奥付

サークル名 ダイヤモンドの気取り屋 & Alya

発行者 狭間 レヴィ

発行日 2015年 8月 14日

連絡先 shikaku\_mattari@yahoo.co.jp

本文 狭間 レヴィ

鶺鴒 かいゆ 様

絵 八樹 ひより 様

ダイヤモンドの気取り屋サークルメンバー  
業火 ふてね日和

スペシャルサンクス

ななふし 君

眼魔礼 さん

喚く狂人さん

ブックオフの中古の本たち

ファッションホモの人々

この本を読んでくれたあなた